農家という空間の可能性

源左衛門農場 代表　早舩源一郎

代々続く農家の長男として生まれ、跡継ぎという暗黙のプレッシャーの中で育った結果、親への反抗心も相まって「絶対に農家だけにはならない」と学生のときに決心しました。その結果、どうすれば農家にならずに済むか考えた挙句、海外に住んでしまえばさすがに追ってこれないだろうと考え、大学では外国語を学び、海外のボランティアキャンプなどに参加していました。

海外の文化に触れ、自分の好奇心が刺激されるのと同時に、海外の人々が同様に日本の文化にとても興味を抱いてるのを感じました。日本の文化はかなり独特で面白いのに発信があまりされておらず、海外ではいろいろな質問を受けることが多いです。そこで、農家である自分の家のことを思い出すと、土間のある和風建築、土壁の蔵、鬼門よけの祠といった建築物や正月、七夕、お盆、餅つきなど当たり前の環境や面倒だと思っているだけだった行事が急に面白く感じました。「これは外国人をうちに呼んだらおもしろい」と、思うようになり、農家を継がないために海外に行ったのが逆の結果をもたらしました。その後、百貨店勤務、専門学校での生態系の勉強を経て就農に至ります。

農家を始めてからいろいろな外国人や都会に住む友達がうちに遊びに来ましたが、彼らにとって農家という空間はそれだけでとても面白いと感じてもらえます。そこに農業の「場・空間」としての可能性を感じました。まずは、広さがある。都市には絶対に真似できない強みです。そしてあえてプロデュースしなくても農家、畑という雰囲気がある。これらは普段接しない人にとってみれば心地よい「ハレ」の空間です。ここではシートを敷いておにぎりを食べるだけでも楽しくなってしまいます。

畑は何とコラボレーションしても面白くなりそうです。畑でアーティストが個展を開く、トマトのビニールハウスでホットヨガ教室、竹やぶで企業研修、大きな栗の木下で英会話レッスン、などなど。都会のビルの一室でやると普通なものが畑というだけで一変するような気がします。そこに海外からのボランティアなどを呼び、日本の伝統行事なども行っていければ地域交流、文化発信にもなり一石二鳥です。

もちろん、本業である農産物の生産があってのことですが都市農業は税金負担や周辺環境の変化で難しい状況にもあります。当農場も地方に比べ規模が小さいので直売やレストランの契約栽培がほとんどでなかなか生産品による収益の拡大が見込みづらいのですが、都市に近いという利点を活かし農場という空間を上手く活用していきたいと思います。

そのためにはやはり情報の発信は欠かせません。最近のtwitterなどは野菜の直売やイベントの告知などには大変便利そうです。情報機器はあまり得意ではないのですがiPhoneも農機だと思ってうまく使いこなしていきたいです。

（はやふね　げんいちろう）

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。